

# OfByForコラム 地域の地域による 地域のための Something NEWS

第⑦回

## 喧嘩祭と舞楽の伝統がつなぐ 地域への誇りと愛着

一般社団法人 洗楓座  
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事

佐藤建吉

子、孫にも伝えられる点で世代間の伝承はさらに強いと思われる。

### ▼共感が地域をつくる

本紙は、新エネルギーの業界紙で、伝統芸能には、直接の関連性はない。しかし、共通するのは、地域の持続可能性、地域資源としての自然エネルギー（「当地エネルギー」）の利用、さらには社会基盤としての地域経済性の確保である。

東日本大震災（3・11）で放射能汚染した福島では、離郷により後継者不足、さらには愛着を失わせられたところもある。地域伝統文化の危機でもある。

地方には、自然や季節との共生、時間と空間の享受など、大都市では得られない豊かさがある。しかも、今日ではICTを使えば、世界とも不自由なく接点を持つことが出来る。今こそ、いわゆる経済優先ではなく、地域の自然や季節、さらに伝統に身を置き、地域の持続性を大切にする生き方について、再認識する必要があらう。筆者はこの思いを深めた次第である。

こうして、糸魚川との関わりが、地域の大切さを、OfByForというキーワードを再認識させられたが、それは復興のキーワードでもある。地域の伝統を大切に、自信と誇り、そして愛着をつくり、新たな伝統を創造したいものである。

### ▼糸魚川との関わり

筆者が新潟県糸魚川市と関係を持つようになったのは、昨年12月の糸魚川大火が動機である。その復興支援に「糸魚川ルネサンス」と名付けた取り組みを行っている。

復興には、スピード感が求められるが、急ぎ過ぎて地域性を消すものであってはならない。大切なことは、地域の日常の暮らしである。特に大事な

のは、継続性と安心感、そして誇りと愛着心を持っていることである。

糸魚川にも、自然に密着した暮らしによって育まれた誇りとなる伝統や文化がある。その例となる喧嘩祭が4月10日にあるというので、それを知るため糸魚川に出かけた。

### ▼春を告げる糸魚川の喧嘩祭

桜は満開前であったが、背後の越後山脈には白い雪が際立ち、春らしさを映し出していた。糸魚川出身の作詞家、相馬御風の作品に、『春よ来い』がある。喧嘩祭は、まさに春の訪れをつける行事である。この祭の後に、田圃仕事が始まる、季節のけじめの恒例行事である。祭の起源は300年以上にさかのぼる。

### ▼地元の伝統継承

喧嘩神輿の後、午後には国の重要無形民俗文化財の一つ、舞楽が奉納される。天津神社の本殿前には、舞楽用の舞台が常

その開催日は毎年4月10日と決められている。

喧嘩祭は、天津（あまつ）神社の境内で行われる。寺町と押上の二つの地区の神輿が一の宮、二の宮として、引手ともににぶつかり合い、組み合い、神輿が相撲を取るようになり、しばらくもみ合った後、突然別れ、一の宮が走り去り、二の宮がそれを追いかける。

今年はこの喧嘩相撲を10回も行った。昔は、もみ合いが激しかったという。素人には分からないが、もみ合いの駆け引きが見どころである。昨年まで引手をやっていた押上区の方に、詳しい解説を受けた。

喧嘩相撲の真の目的は勝ち負けを決めることではなく、「祈願」することにある。神官装束の二区の総大将の合図で、同じ倉庫に二つの神輿を納めるため、定位置から走り運ぶ競争「お走り」で、豊穣と豊漁を祈願する。寺町は農業、押上は漁業を祈願している。

糸魚川の天津神社の喧嘩祭（2つの神輿がもみ合っている）



ちは、喧嘩神輿のオープニング・セレモニーでも、その装束で親子行列に登場した。

筆者は、当地の祭や舞楽が300年も続く背景には、子どもたちの登場、しかも主役を演じる場、しかも主役を演じることにあるのはと考え、同時に、大人の舞楽が並行して演じられており、子どもたちに、見本を示していると、見ることもできる。

事実、舞楽のトリは、「陵王（りょうおう）」という、大人の一人舞である。それは、最も注目を集める舞で、中国の武将「蘭陵王」が敵を勇壮に打ち破る内容であるという。これには、桝席から「待ってました！」や「ブラボー！」の声援が飛び、現代人にも通じる神魂が境内に木霊した。この共感は、次世代にも伝承するに違いない。

子どもたちの参加による伝統を継承している例としては、ドイツ南部の村、オーバーアマガウで上演される住民参加のオペラがある。そのオペラは、10年ごとに開催される。子役を演じた者が、次は若者役、さらには壮年役や老年役を演じる。糸魚川の舞楽は、毎年開かれること、親から